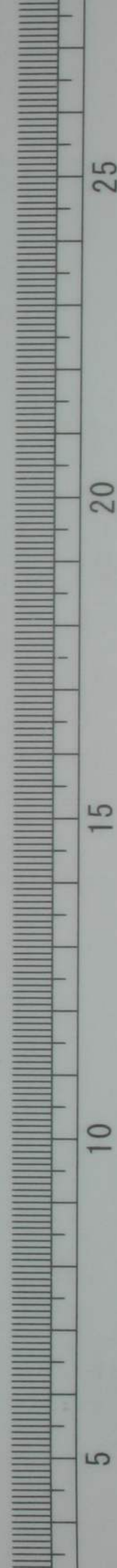
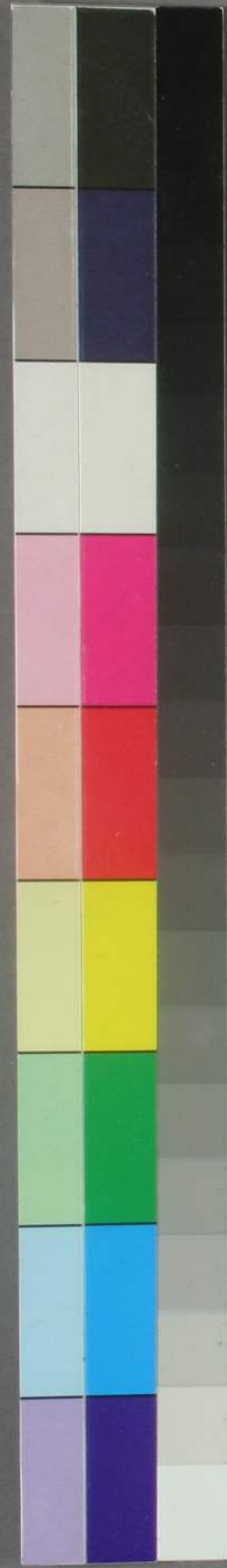
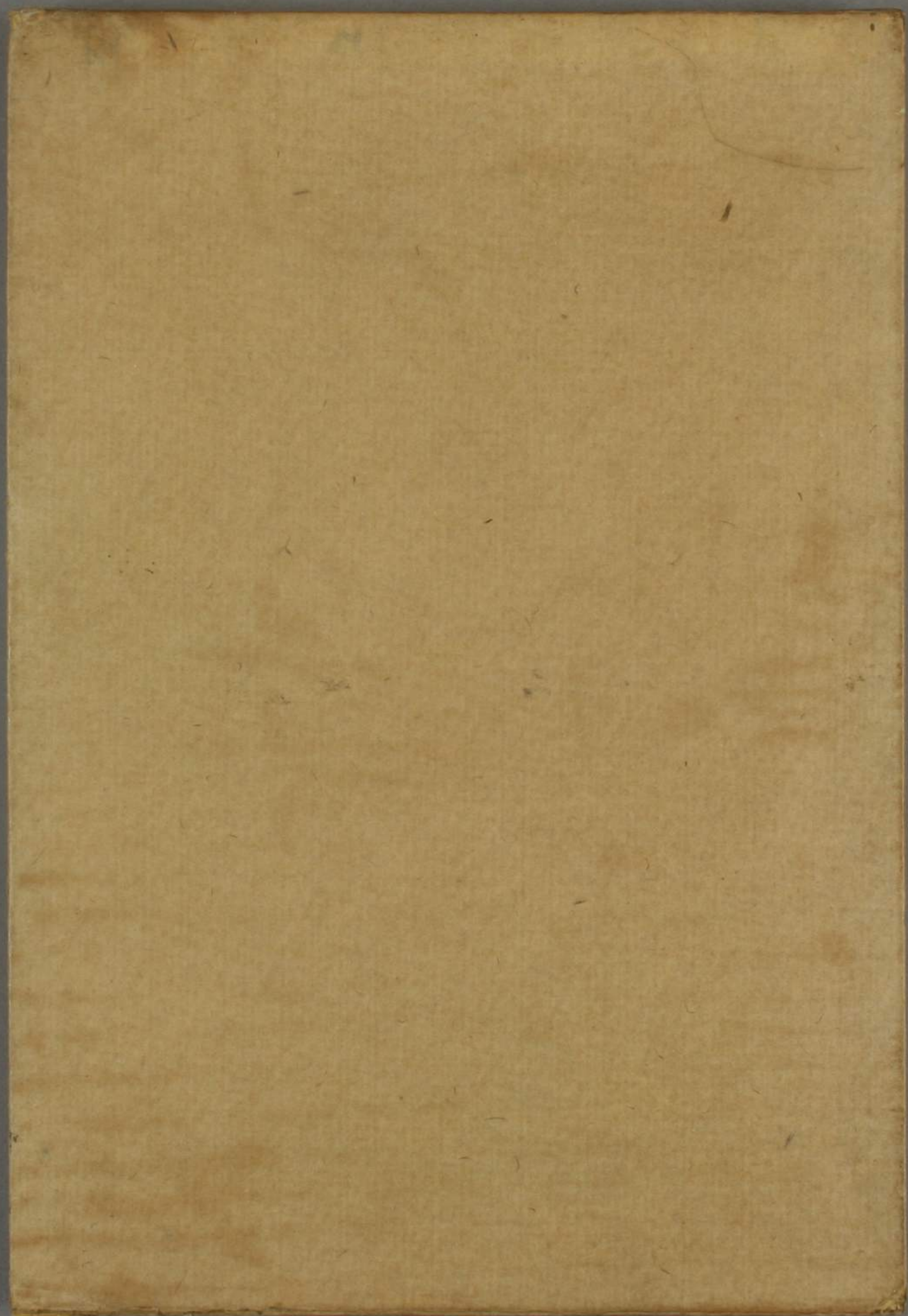


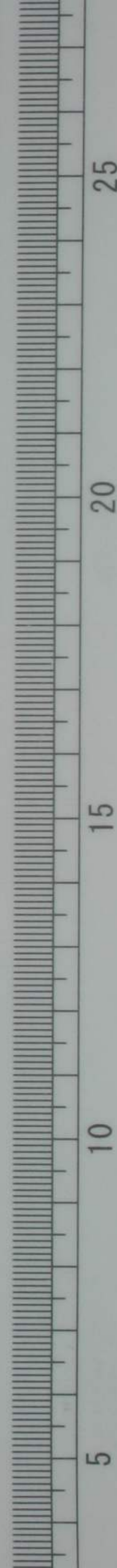
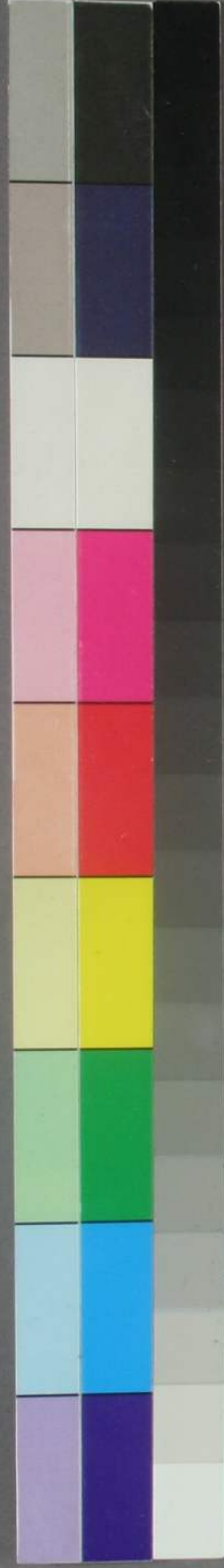
正午の果實



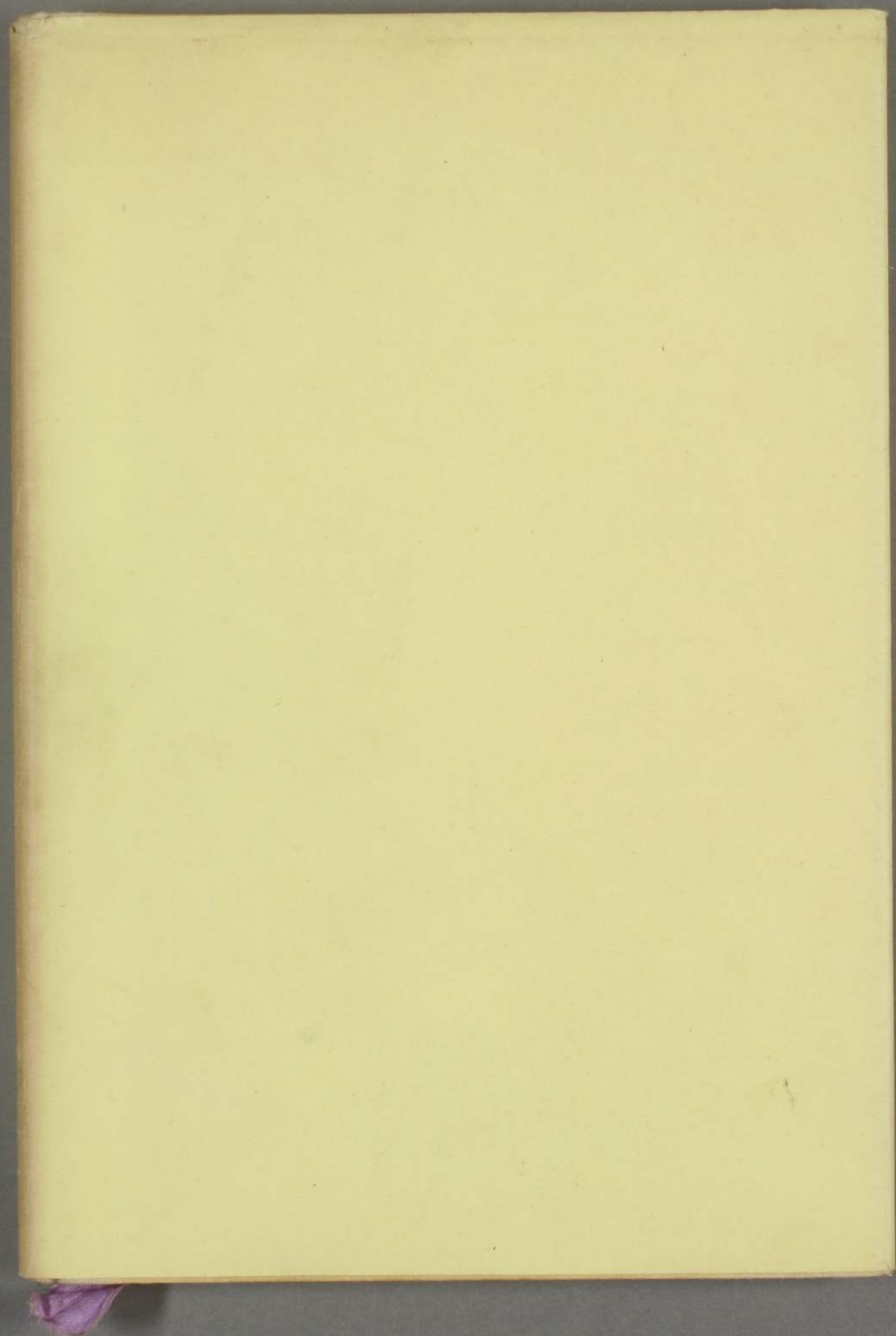
正午の果實



正午の果實

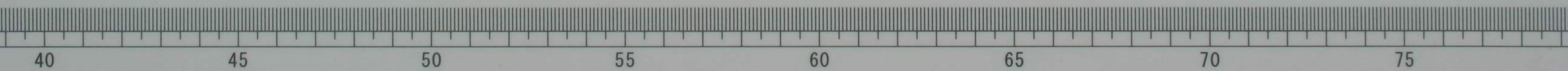


正午の果實

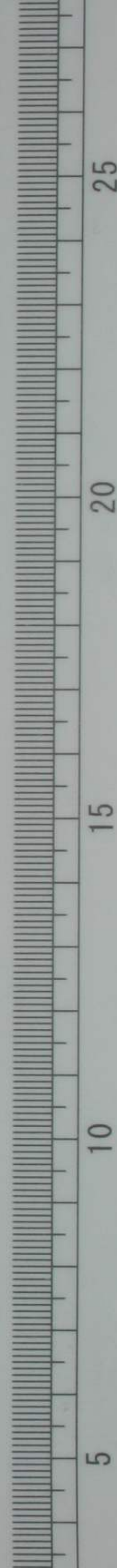
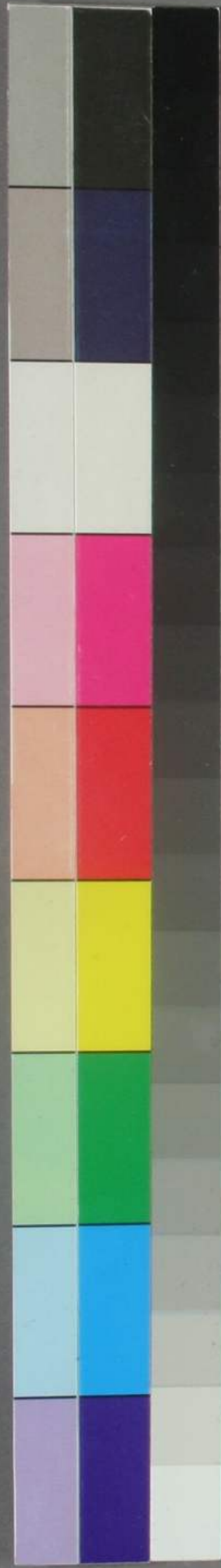


正午の果實

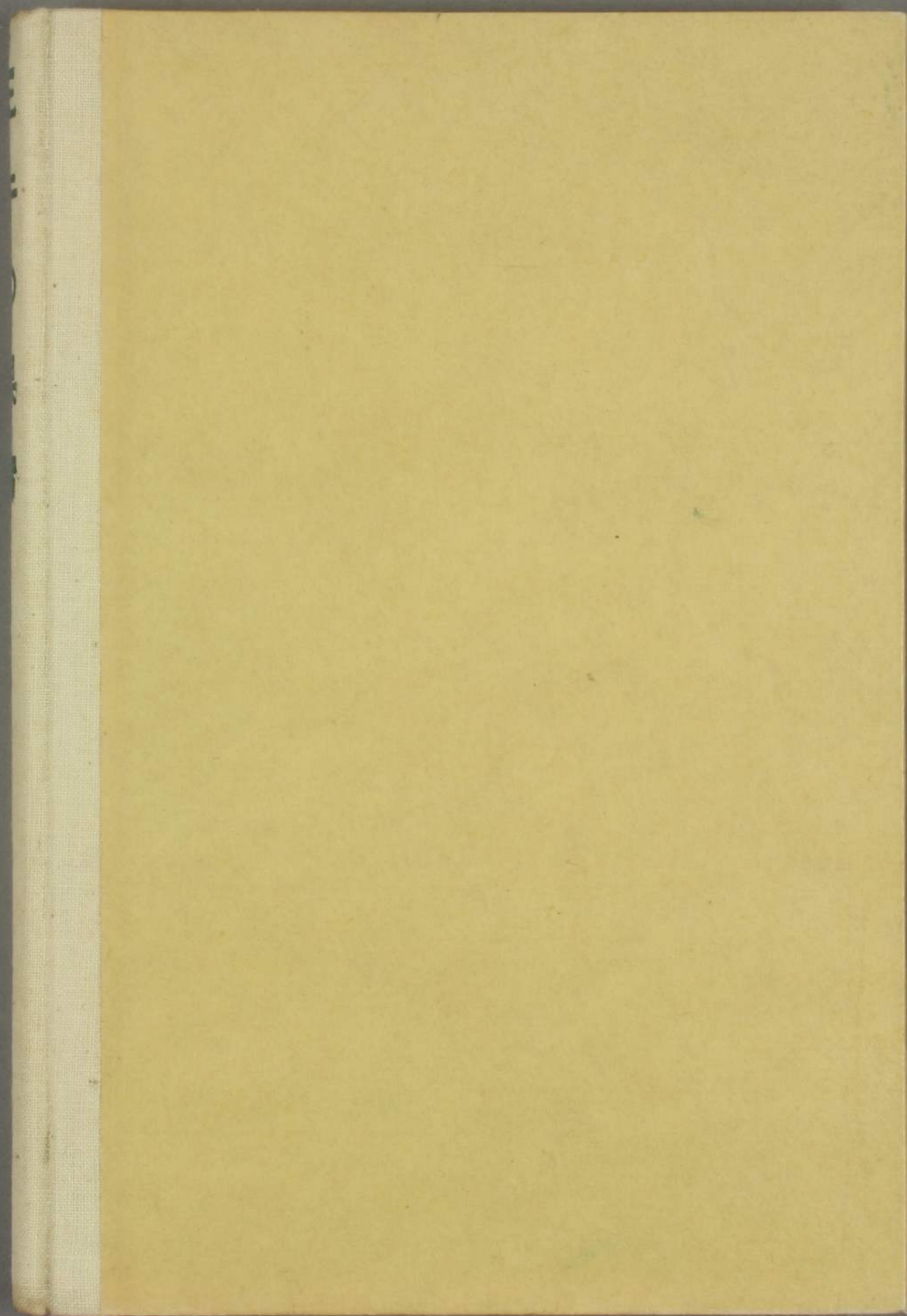
正午の果實



正午の果實



正午の果實



菅忠雄様

家藏板百冊中
特裝三十部六

北村初雄

正午の果實

北村初雄

序

私の詩は、進展しつつ在りと信ずる私の人格の、其の活動そのものたらしめ様とする願望の、自からの成就を意味する。従つて私が己れを虚しくするところに、私の詩は生れる。

即ち私の詩が私の人格の活動そのもので在る限り、私の詩は、私の意識に制約せらるるものに非ずして反つて其れを制御するものである。

私の詩は、その一篇ごとに、その香匂と、その色彩とを異にする。

乍し、私は其れを私の人格が外界の變化によりてなす震盪を意味するものとは考へずして、寧ろ詩そのものの性質が、しかなすものと考へる。即ち詩は絶えざる進展を持つ人格の力が、特に緊張されて、詩人の個性の外へと溢れ出やうとする、ある刹那に即して生れるもので在るからである。従つて其のある刹那の、しかも絶えず進展しつつあるところの、人格活

動それ自身なる詩が、それぞれ其の *État d'esprit* に特有なる色彩と香匂とを
持つことは當然のことと思ふ。しかも其の特有さはひとりの詩人のそれと
して其の統一さるべき方面をも備えて居なければ無らない事は勿論である。
私の持つ理想は私の人格の働きそのものの中に含まれて居る。
私の思想は私の性格であり、私の性格は私の思想である。

西曆一千九百廿年十一月

北村初雄

La ^{リサレット}Risette 一九一九年

Sa fille avait grandi parmi ces chants, et son

âme entière n'était qu'un tendre lied, une directe

expression de la Nostalgie et de l'Aspiration—Novalis

わが小ねち amie に。

輪舞 一序詞

ゆつくりと廻つて居る人の輪は、
日光に照らされて青く眼にうつる。
其は人の聲だ、其は人の優しい面輪だ、
白い羽を空へ昇せるのは。

(影に涵つて居る樵の樹。)

人の跼む姿も人の伸び上がる姿も、
空をうつす池のやうに、一様に美しい。
花のやうな少女の身體は、この

人の輪をうつとりと霞ませる。

温かい涙を眼に溜めてゐると、
人の素直に育つて行く態や、
人の喜ばしげに話す言葉やが、
白い鶏のやうに仄かに羽搏く。

(小さい掌のなかに神様がゐて、
花の光と匂ひとに涵りながら、
人を思はず微笑させるやうな、
悪戯を待ち構へて居る。これは、
人の考へられぬ昔から……)

軽い足音は夏の雨。
ゆつくりと人の輪は廻つて居るが、
心の動搖は馬より走る。
一人の少女を捉まへやうとすると、
日よりも駆ける。

(風に揺れて居る樹。)

空を凝視めて居ると、心が、
湖のなかの魚のやうに澄む。
人の落ちついた色彩は、黒い眼と共に、
踊つて居る身體を引き緊める。

(日當りの善い土地の、
麥の穂は重く俛だれる。)

人の輪は愉快そうに笑ひながら、
廻つて居る。廻つて居る。それは、
日光に照らされて青く眼にうつる。

Adieu

さようなら!

振り返ると、まだ笑つて居る小さい仙女、
日の中に眩しそうに眼をしかめて、

ちつと此方をむいて、まだ笑つて居る。笑つて居る。

さようなら！

振返ると、まだ笑つて居る小さい仙女、
樹の影に涵つて居るあの白い額は花のやう。
風見のやうに此方を指さす可愛い眼。

さようなら！

振返ると、まだ笑つて居る小さい仙女。
あの栗毛色の髪の毛が燃えて居る、燃えて居る、
お寺の屋根に巢を懸ける鴻の様に眞白に。

さようなら！

振返ると、まだ笑つて居る小さい仙女、
藁火のあとの烟のやうに、何時までも、何時までも、
續いてのぼる笑ひ聲、あの柔らかな頬の波立ち様。

さようなら！

振返ると、まだ笑つて居る小さい仙女
僕はもう堪らない、堪らない、もう一遍！ そう！
薔薇の花が、胸の上で激しく、激しく揺れる。

大きい接吻。小さい接吻。

さようなら！ さようなら！

花

ちつと花を眺めて居る黒い睫毛の上に、
黄ろい蜻蛉のやうに日光が愁むて居る。
子供は膝の上に手を交ね、
仙女のやつて来るのを待つて居る。

白い花辨が風と出會ふ赤い鉢のほとり、
子供の黒いエプロンが陶器のやうに、
光澤に白く光る、この四月の朝、
何を想つて居るのかしら、小さい頸を傾しげ、

子供は黙つて考へて居る、柔らかい日景の中。

花の匂ひに充ちた子供の髪の毛の黄金の輪、
その周囲をかすかな羽音を立て、蜂か廻る。
子供はふと眼をぱつちりと口を圓くあけて、
青い空を仰ぐ。其處にも青い薔薇の花。

ほんとうに許嫁の眼のやうに優しく、
子供の心はうつとりと花の上に注がれる。
海から吹いて来るこの藍色の風の上に、
仙女の足音は聴えないかしら——黙！

話

明るい食事部屋の一つの食卓を中に挟むで、
桃心花木の椅子が二つ据えられる。
暑中休暇が、その両親や妹たちと一所に、
この山荘へと運むだ小さい生徒の、圓い口唇が、
緩くりと啜つて居る、大きな肉汁の匙の間から、
時々現はれる愉快な眼。その度ごとに、
人形を膝の上、ひとりの子供が頷ずく微笑。

語りだす話におもはず油がのつて、
揺ぶる肩から肩へと飛び跳ねる輝かしい花虻。

子供は人形をそつと膝の上からずらしながら、
眼を圓くして聞き惚れて居る。温かい日光！

小さい生徒は話を一寸途切つて、得意そうに、
可愛い、夾竹桃の花の様な顔を眺め、扱て、
偶意とらしい溜息をこと更、重く吐きながら、
水の影が混がり合つて居る天井を見上げる。

話をはつた小さい生徒の口唇の上に、
聴き終つた小さい子供の眼の上に、
忽布の花のやうに仄のりと色ずいて来る、
緑色の小さい微笑……

窓ごしに静かな湖水が一杯に擴がり涉つて、
白い花模様のレエスの窓帷を曳網の中の魚のやうに、
圓く膨らませては激しく揺らめかす涼しい風、
白塗の小蒸氣が蒼い滑らかな水上を走り過ぎると、
その青い烟りが二人の睫毛を柔らかく暈らせる。

手帳
— 舊稿 —

曲り迂つた文字が消されたり、
書き加へられたり、揉み消されたり、
僕の中學一年生の頃の手帖は、
僕の手垢で眞黒、そうして
其れを見ると寂しくなる。

重ね合す掌のなかに、
其を挟み、僕はちつと倦れる。
粘りつこい鹽風と一しよに、
この拙ない筆蹟の上に、
灰のりと濕つて居る白い墓碑。

僕は知つて居る、
あの人が隣人で在つたこと、
あの心地よい微笑とを。
乍れど、其つきり！ 其つきり！
柔かく小松の葉がふるえて、
海の風がいま通つて行く。

然う！ 僕は幸福かしら？

この海の風を聴きながら、

明るい笑ひを湛えて、

僕を眺めた人を知つて居る、この僕は！

（あの庭には黒い蘇鐵の葉が押し擴がつて、

其下には薔薇の木が一株あつた。）

乍つど、

曲り迂つた文字が消されたり、

書き加へられたり、揉み消されたり、

僕の中學一年生の頃の手帖は、

僕の手垢で眞黒、そうして、

其を見ると涙が一杯……

眼

—歌話—

日に暈つたり、また

身を轉して仄のりと輝ふて來るあなたの眼、

小さい口唇を窄ます様にして居ると、

あなたは全て鶏のやう！　あなたは全て豆の花！

時計の象牙の分針のやう

前に踏みだす一足ごとに、話し懸るか、微笑むか、

元氣よく、薄緑色の忽布の花の花飾り、

蛙のやうに空へと跳ねるあの藁帽子！

あなたの眼は、僕の眼。
僕の眼は、あなたの眼。
全て綾取をでもする様に風を掠める小さい姿、
眼の中に、
河があり、懸橋があり、坊主頭の葱畑がある。

海の青さに濡れながら、海の光に酔ひながら、
帆を捲き上げた船長が此方に向いて話すやう、
青い野菜畑を背にして此方を見つめる。ばあ！
あなたは本當に海の白い水沫。

日に戻つたり、また、
身を轉して仄のりと輝やうて來るあなたの眼。

小さい口唇を窄ます様にして居ると、
あなたは全て鶏のやう！　あなたは全て豆の花！

祝祭

—終詞—

青い芝生が、
なだらかに丘を起し、丘を沈めて、
走つて居る。この光圏。
栗鼠の背毛の温たかに、
青い空をば映す頃、

白い上衣を着けた子供たちが、
一つの青い圓丘の上で、

輪踊を踊つて居る。青草の、
薄荷のやうに爽快しい香匂が、
渦をば巻いて空へと昇る。

虎斑のやうに、
子供たちの白衣を掠める、
雀の群が、
快活な鯖の鱗のやうに光つて行く。

春！

春！

春！

可愛い脛や膝頭の群たちが、

揺めく風光のその中を、
焔の中を、
光の鞠を蹴り上げて行く、ぐんぐんと。

春！

春！

春！

遙かの湖水に水をば汲みとり、
雲を作つて、

南へ進む、

風に、

撒れる花々のその匂ひ。その光り。

春！

春！
春！

ばたりと止まる、
圓舞。

足を停めた子供たちは、一對づつ、
向ひ合ひ、
につこり笑つて、頷くと、

歩み寄り、
相互に、

草の莖で相手の指をば確かと縛る。
指環。

大空の水溜の、
白い反射が光つた蝗の群のやうにと、
跳びかけて行く、子供のむれに！
其れが青い空気を、
圓るく取り巻き、笑ひに崩す。

春！

春！

春！

青葦の群

一九一九年

柳澤健氏に

一時

砂を凝視めて居る。
空の中の青い鳩のやうに明るく、
聲を矢車草の花の間に弾ませるのは、
幼い子供の時の基督。

閃めく白い粒。
草の匂が馬の鬣を掌のやうに撫で、
胃をつけた虫が樹の洞に住ひながら、
空の青さに見惚れて居る。

海は全圓。

草の上に憩むて居る羊たちが輪をつくり、
Bagdadのお祭りのお話を聴て居る。
日が山楂子の葉をひろげ始める。

魚が跳ぶ。舟が滑る。

小作地に耒の刃を燃して居る人達は、
長い柄の上に手をのせ、頤をのせて、
風を見送つて居る、眼を上げて……

日輪

恒に東から西の方へと吹く風を受けて、

黄金の圓い止木の上、吹き流される、
一羽の白い鶏の鳥冠が、
静かに帆を孕ます風に搔れて居る。

柔かい眼眸に、白い髯を波立たせながら、
巡錫する古の聖者達、
刈込むた小山の圓頂に、長い耳を立て、
兎馬たちが歩るいて居る。

夏の終り、澄んだ空の上、
幼い友達の手をとつて黍畑の側、
静かに見交し、笑ひ始める時、
白い鶏は啼き、首俛だれ、

西の方へと沈み消えて行く……

會合

一條の烟がくゆり立ち昇る、
空の藍青、
地の黄緑、
樹葉と小犬の交はるところ。

斜面を日光に耀かす死火山が、
空を割つて白い霞を棚びかせ、
畑をめぐる小徑が湖水に下り、
許多の葡萄。

跳ね上る小さい獣、白い毛並
ふと見下す葡萄棚の蔭に、
圓い顔、其の淑やかな立すまゐ。
手を舉げる、風の中！……

杜世忠

(建武四年北條時宗元使を斬る)

白夾竹桃の花匂に充ちる室内、
繊細い足の運びを確かと嫵き止め、
噴煙のやう、日に燃やす哄笑の一群。
約婚の契りを結んで指さす蒼天。

駛走する星々と波浪とを眼下に、
身を揺らし、身を揺らし、
蒼い海霧の中、手摺む彼の眞白い微笑！
海原を潮流に沿ふて、横過る海峡。

來歴の一閃。力を罩めた彼の抱擁！
日本の山水を映す刀身のまへ、
噴煙のやう、日に燃やす哄笑の一群。
齡と戀とを、身より斷つため、
靜かに、今、前へと差し出す猪首！

旅

程

一九一九年

香高い牧草を踏みしだき、
一人の子供が歩るいて行く、
空の青を身一杯に浴びながら、
額を上げて歩るいて行く。

元氣よく、兎のやうに躍り跳ねる、
その白い素足は薊の刺を、
薄の葉擦れを恐れない。
彼女は前を見る。然して彼女は歩るいて行く。

*

白い窓枠に縁取られた、
夥多しい光に充ちた風景の中、
私は認める、彼女を、遙かの丘に。
其處で私は帽子を取り、部屋を跳び出す。

眩しさに眼を顰め、方角を見定め、
私は大股に歩みだす。畑を見捨て、
原と林と森とを後に擲げやつて、
山を攀ち、彼女の跡を追つて行く、

白い布を古雅に縫ひ合せた、
上衣一枚、髪を解きほぐし、日に灼け、
子供は敢然と歩るいて行く。

額を空へ、彼女は黙し、彼女の足は迅い。

道が様々な勾配を採るため、私達の足は、
水に涵り、澤を分け、藪を手折り、
亦是と樺との茂みの間に、分水嶺を、
遙かに見下す事もある。輝く空氣。

窸音は彼女を驚かさない。彼女は歩み続ける。

私は近づく儘に彼女に尋ねる。——誰です？

乍し、言葉は草の匂ひを帯びたまゝ、
空氣の中に虚しく融ける。光る踝

私達は無言の儘で歩み続ける。

私は肩を刺す丈高い草を振り除け、
彼女の背を、上衣の下に現れる腓を。
蒼窮から来る光の中に見詰める。

生き甲斐がある！ 私は今日、初めて、
均整をこの小さい身體に學ぶ。
實に善い。實に善い。

世の中は想つて居たよりも美しくしい！

**

日が暈る。その都度、
草原に影が充ち、

子供はぐんぐんと歩るいて行く。
喜悅が地にある。喜悅が天にある。

紺碧色に空が涵たす、
際涯のない白菊の群を横過ると、
道は勾配を作つて、一帯の灌木林となり、
身體一面が日に照らし出される。

——貴君は生れました。

不圖、言葉を背越に擲げて子供は、
簇葉を除けて、云ひ續ける。

——妾は生れました。

林を抜け、鱷の様な赭岩の上を、
因幡の兎のやうに跳むて行く。
勇敢なその足許を追ひながら、
私は氣を晴れやかにする。

私は彼女の言葉を悟ると、
足踏も強く岩石を蹴り落しながら、
微笑する。微笑する。微笑する。
心の中に充ち擴がる限りない陶醉！

金黄色の空。空が靜かに燃える。

暮れるな——と私が想ふ間もなく、
蒼青色、黒色、其間を走る淡緑調、
宵を飾る星々が仄のりと現はれる。

月光を浴びる子供の踵。

深い静寂の中に、風の群が揺めき、光り、
白鳥星座、琴座、蝸星座と交はつて
冥界に去つた偉大な魂達が輝き始める。

子供は快活な足調を迅ませる。
私達の祖先の祖先が曾つて名稱けた、
瑞穂の國は八つの島を海に泛べて、
遙か眼下、眠り、かつ夢みて居る。

私はこの月を愛する。この星を愛する。
次第に稀薄となつて来る空氣に、
私達の昇上を感じる。交はる足音。
子供は猶もぐんぐんと登つて行く。

地がたえる。子供が振り向く。その微笑！
私は無意識に立ち止まる。全身が前倒る。
深い呼吸。其が懸て胸一杯に喚び迎える、
激しい鼓動に、眼を開らく。

風が迂ねつては消え、また光る。

私は身慄ひを押し止めるため、
亢上りに亢上る。子供は立つ。
蒼い月光の下に私は其を見詰める。

——様々な土の匂ひに、

私達の足は塗みれて居ます。

彼女は光體の本源でもあるかの様に、
静かな、かつ爽やかな微笑を洩らす。

語尾の震えを消すために、
口早に語る、私の答を俟つて、
子供は静かに手を差し伸べる。
深い呼吸の中に私もまた。

見上げる天が眼先に連り、
手を取り、私達は歩みはじめ。
かゝる時、生れる古代の神々、
涙が溢れる、静かに、静かに。——

生の燔祭

一九二〇年

漁獲

—矢野目氏に—

古の漁夫は、
漁る手を憩はせ、
はるばると、
海を、
望む。

擲げる。鉛を！

澄むだ水面は一様に波立ち、
魚は躍り上り、

空の中に、青い脊鰭が、
華を展かす。

海面にゆらゆらと、
立つ、透き抜る水蒸氣の群が、
日に映じ、
漕座に立つ、
戀人を咽せさせる。

明るい微笑！

海の波は油脂のやうに重く迂り、
腕は、確かと權を握る。

心地よく哄笑する、
舳の海豚の首飾が、
崩れむばかり。

風が帆を訪れる。

海と天とを限界ない背景として、

立ち並ぶ、

戀人の肩並に、

皆白い飛沫。

日景に、時を知り、

帆を西へ傾むけ、

戀人を右手に抱き、

航路を按ずるために、
むづと座る。

古の漁夫。

柏手を柏つ。さて、

しづかに、

聴く、

遙かの反響。――

INSVIA NATA

From the earth thou spriggest

Like a cloud of fire;—Shelley.

宏い海面は正午の日光の中に、
希臘の女達のやうに水浴する。
その頸、その乳房を、象るものは、
群れ上り、群れ下りて、魚を啄く鷗。
一面の深藍色が眼先に擴がる。

日光は佛陀の頭上に燦めく、
圓光のやうに環流を彩り、

海上を駛り廻る！
翼ある氣流と香匂。

生れる海泡。……

微風は目禮を取交しながら、
光の矢を遁れ去り、不圖、
海の中央、かの鱧の群が遊泳する、
日輪の眞下、微かな響を伴ひ、

生れる海泡。……

始めて花の香匂に充ちた、

透明な空気を飲みあふる、
真白い肉體のやう、
爽やかな海潮の生れるところ、
花環を懸ける鷗の一行。

遙かの方から駛つて来る、
驟雨が目睫の間に霽れ上がると、
子供のやうに聲をあげる微風。
海波から柔かい音楽が起つて、
浮び上り、虹を分ける。

生れる海泡。……

空の青さの中に展けてゆく、
正午の百合の花辨のやう、
湧き、溢れ、充ち、擴がる、この
真白い海泡の真中であつて、
今、

空をめがけて上がる一島嶼！……

蒼穹に塗れ、

はや、霞む、白熱の鋼鐵、

青綠色の其尖端！……

冬

—熊田氏に贈る—

風窓から白い柔毛が雲のやう、
吹き込むて来る谷あひの一軒家。
かづ知れぬ海鳥が囀を作つて、
激しく其の屋根上を翔びまはる。

姉は氣遣しげに見詰めながら、
時折、その蒼い額を撫で上げる。
その間、妹はその繊細な手を取り上げて、
和かく其上へと口を寄せる。

白い寢臺を窓側にちかよせて、
七歳になる弟が臥つて居る。
曇る玻璃板を透して見える、
黒い岩、小さい空地の僅かな緑。

海鳥の羽の擦れ合ひが
鈍い明るさを保つ灰色の空から、
落ちて来るこの一室。

光澤な褐色の卓子の上には
木製の馬が首を傾けたまゝ立つて居る。
繪本の群が其を取り巻き、その傍に、
葉子が素焼の鉢に盛れて居る。

海鳥の啼く合間、合間に、
静かに二人の姉に問ひかける、
その眼は何かゞ欲しいかのやう。
花瓶から散る薔薇の一ひら。

いつ知らず潤むて来る弟の眼、
二人の姉は白い梓椽に飾られた、
亡い両親の繪姿に心を勵ましながら、
手布で拭きとる其の涙。

姉たちは小聲で訊ね合ふ。
乍し寂しげに再び眼をば落すばかり。
弟は喘いで居る。弟は喘いで居る。

蒼い影が部屋を領して、微かな吐息。

「さあ何が欲しいの、裕さん。」
意を決した姉達が問ひかけるまま、
向き返つて眼眸をむけ、弟は、
また寝返つて空を見詰める。

「僕ね、見たいの、
お日様が……………」

頬

光が頬に觸れ、

その色合となる刹那、
其の清澄な感じが消えて
現れる温かさ、また重さ。

色の起伏は柔かに、
眼先に煙りゆくその間、
一色の明るむところ、
一色は影をつくり、
共に湧き上げるその調子。

黄の中の色映ゆる赤。
赤の中に波立つ黄。
立ち廻るさまざまの色彩は、

雨霽れ上る風景のやう。

この明瞭さ。この素直さ。
眼に見えぬ一色が、光を越え、
己れを現はしてゆく其力。
色は融け、色は溢れる。

生々しさ！

ひとが融け、さながらに、
充ち擴がる空気の中、
見詰めるままに、
浮きあがる、わが全身！

風

空から来て、
松の葉を、
風が揺る。

手のやうに、
和かに、かすかに、
動く葉。

向ふへ、向ふへと、
葉の間から、

光と洩れ、

空へと、また、
吹いて行く、
風。

日の下に、
揺れて居る、
青い松の葉。

この眞晝。

季節

手に取り上げて、しげしげと見入ると、
自分の魂が一つの骨董品の様に乾涸びて居る。
日光が落ちると窪味が浮き上つて、
快活な緑黄の色調となつて光を放つが、
日光が消えると、灰白色の老齡が落ちる。

宏い畑地に農作物が輝いて居る。
軌道は蒼穹の中に融け込めて居るが、
太陽の軌る音響は、
透明な燃え立つ空気を、數里四方、

絶えず波の様に揺つて居る、
聲もなく。

四季が絶えず、
影を落すこの魂の池は、
今、春を感じる。子供の生毛！
水面が温み眞白の鷺鳥が、
泳ぎ廻る。その黄ろい水掻と柔かい胸毛とに、
恍惚として、その映像を、
全面に行き、渡らせ、その甘い擦ゆさに、
心持よく身を震はす。楽しい戦慄！

暗い池底の一面が、夕暮の、

金色の佛像の顔々のやうに打ち沈むて居る。
日が射し込むと、
酸酵物のやうに浮び上る魚群。
可愛い奴め！ 魂が咳く。自分は其れを、
假寝の中に、微かに聞く。

日光に自分の生命を預けてあるかの様に、
その照り具合で、魂が憂鬱となり快活となる。
理性と因循と怯懦とが此處に折り重なつて、
自分の魂を一つの骨董品とする。
自棄氣味に、自分は光澤を出すため、
擦りに擦る。駢足だ！ 駢足だ！ 時が過る！
然う！ 希望する！ 希望する！ 希望する！……

突如、
灼く蒼穹が頭上に擴がり、
乳母のやうに、
光、熱、その透き通る空間の揺床を以て、
この魂を慰す！
僕は跳ぶぞ。僕は躍るぞ。
魂が生きた!!! 目醒めた!!! 夏だ!!!

墓碑の群

死んだ人なんかいないんだ——チルチル

その遠い際涯が水蒸氣のために、
薄紫色に霞むて見える宏い草原。

日を受けて、風が
緑色を白色に、そつと揺る。

野面に至るで人が作つたかのやう、
行儀よく立ち列び、
恍とりと手を繋いで、
灌木の群が黄ろい花飾をつけ、
環を廻らす無音の圓舞。

ふと、足を止め、
顔を舉げると、
澤山の人たちが、思ひ懸けなく、
群れて居る。

全でお祭りの日のやうに、

灌木の群に取圍まれて、あちら、こちら、
ちつと立ち止つては、話し合ふ人達。
優しい會話が香煙のやうに立ち昇つて、
柔かく蒼穹へと融けて行く……

日が照らす欣し氣な顔々。
胸が大きく、大きく波打つて來、
僕は思はず話かけ、手を差し出す。
人達のあの姿！ あの姿！

髯を生した誰かのお祖父さん！

聞えない。たゞ人達は微笑むて居る。……
乍し、この心は温かさに充ち、平和に充ちて、
言葉が翳のやうに落ち、また閃めく。……
僕の言葉だ。然れども亦、あの人達の言葉だ！

青々と生ひ立つ灌木の中、
此の世となく、彼の世となく、
静かに、静かに、移つて行くこの日景。
息づまり、火照る頬。

難有う！……

散策

—西條八十氏に—

枝を突き出す。擴がる緑！

明澄な空氣が、

日景の中に燃え上つて、

移動する雲の群に觸れると、

樹一杯に揺めく日光！

帽に斑影、頬に微風、

小刻に、緩りと小徑を歩く。

日と若葉と土との匂ひ。

身を轉すと、

堤に倒れる。頬をさす草葉。
水のやうに湧いて来る、
初夏の歡び！

確と握つて、眺める拳に、
眩しい程の日光の破片、
生の充溢する血脈の隆起。
その上を、一匹の蟻が、
匍つて行く。

寢返つて空を仰ぐ。
遍く、ゆき渡る光の分散に、
眼を顰め、深さを測ると、

思はず、
この全身が、
空へのめり、
落下する心持。

日が耀き、樹葉が展げ、
徐ろに躍動する世界に、
沈滞の一點、
この心！

遠く、
風が穀草を靡びかせ、
日向の匂ひを、

二條の川に濯いで居る。
静かに、立ち、
土を拂つて、
歩く。

日中

ばつちりと、
展いた眼。
濡れて居る、
喜び。
蒼い翳を落とす、

空。
睫毛の下に灼く、
微笑！

微笑！
身體中を跳び廻つて居る、
びちびちとした、
一寸法師。

顔が、
一寸、傾むく。
髪の毛が額を撫ぜる。
その白。

その黒。
それが融けて居る、
温か味。

魂の、
花のやうに素直な、
優しい、
心を罩めた贈物。
この空氣！

鳥のやうに、
羽搏く、
聲。聲。聲。

其れが融けて行く、
青空！……

凡てを、
揺つて居る。
陽炎。

少女。
僕。
日輪。

接吻

確しんかりと、
この眼を以もつて、この心を以もつて、
相あ互ひに、
凝み視つめる。

睫まつげ毛の影に涵ひたる、

瞳ひとみは、

夏。

緑葉、

映うつる。

顔一杯に、
漲みなぎつて居る、
生いき々くしさ。
その光耀。その香か氣き。
恍うつとりと、
瞬またかず。

充みつ、

生ま活。

充みつ、

活き力。

戀人がある、

この僕にも！

微笑！
顔が炎る。

黙つと、
凝視める、
瞳に、
迸しる、
この全身！
この熱禱！

.....

出す。
手。

顫ふ。

静けさ.....

APOLLO

DAPHNE は河神 PENEUS の娘。彼女の美しさに心惹かれたる APOLLO 彼女をひき捉えむとせしに、彼女は救ひの祈りをなして、一本の月桂樹と化しぬ。

湧き上がる、感情を抑へ、
跳び立つ躰を確と振じ伏せ、
俺は見る、
DAPHNE を。

真白い、
裸體。

草を握る、
俺の手が顫えて居るのは。
草の間の、
俺の眼が霞むてゐるのは。

胸。
烈しい脈搏が俺に告げる、
波立つ血の循環を。
喘ぐ。喘ぐ。

水蓮の圓葉と、
其の花の群の中に、
息づいて居る、
肩。

その背筋に、
緑色の影が涵り、
生々とした一線を畫いて居る。
其は双方の隆りの、
美しい友情を思はせる。
花。

温かい圓味が、

柔かく旋つて行く、
濡れて居る肉體。
心持よく日光が其上を滑べる。
風。

輝やける肢體！……

世界を循り、
世界を生かし、
世界を育くむ、
この火！
俺だ。俺だ。俺だ。

心持よい柔軟性を見せて、
俺の觸覺に、
媚び、
水母のやうに融け込む、
優しい肉體。
手摺むか！

虚しく、
伸べ、
展げる、
手……

掻き撈る頭髪を、

ぐいと引き上げ、
香り高い水草の中、
俺は見る、
空を。

揺れる、
青。

一本の、

樹。

其れを廻つて、

白雲の群が通り過ぎる。——

相模灘

眺め入る、

この手、

砂に潜り、

其上を潮が寄せ來たつては静かに引き下がる。

男一匹の腕節。おもむろに

隆起する肩胛。

此處にある、この

体軀。

凝つと自らの精神と姿体とを眺め、更て
心肝の一点より、眼叩く。
見上げる赫灼たる天体は、静かに、循環り、
海洋は擴がる。

力を罩めてこの腕を前方へと差し伸ばす。
胸の鼓動は昂まり、昂まり、
頬は熱する。

擲つ！ああ、石は落ちる、眼近に。

波は立ち、波は碎ける。

生。
意圖。

全心を轟く海洋の展舒に、音なく、涵す。

向上

先生！ 先生！ 先生！

日當の善いあの小學校の教室で、
むかし、
聲を張り上げ、
答へるために、机の上から身を伸せてまで、
差し上げた此手。

先生！ 先生！ 先生！

力を罩めて、確かりと、
今も、この今も、
喚び、
差し上げて居る、生命に。

昔、あの小學校の先生たちは、
私の無邪氣な答に、
頷いて、

日光の燃えて居る髯の中で微笑された。

眼を輝かせ、生命は、
この生活、この勉強に、
心から悦むで、

大聲を張り上げて笑つて呉れるで在らうか？

關はない！

生活の息を弾ませ、
燃やし、
前へとぐいぐい進みます。來い、
私が生活の中へと織り込むで行く、
運命の資料たち。

無限

—茅野先生に—

天は、

なみなみと小供の手に、
海洋の光を充たす。

一息に飲み終る。

口のしずくを拭くと、
子供は微かに笑つて、
またも差し出す。

希臘的風光

一九一七年

三木露風先生に

像

(一九一七年)

光來たる刻、大理石飛び散りぬ。
飛び散りぬ、心を舉げて彫るこの大理石、
漏刻の齋らす時は閃めきぬ、
閃めきぬ眼内に、
その眼内、彼の山嶽の炎移し來たりて、
充て、火炎の如し、火炎の如し。

輝きぬ一体。

見守りぬ其を。見守りぬ其を。
わが彫みしは我なるか、彼女なるか、

朝なすその歡喜、夕なすその歡喜、
巖石を廻りて水は落つ、その滴音、
實に、實に、その滴音、彼女の顔、彼女の四肢は。

語れ！

われ擲げぬ、

全身を恍惚として、その前に。

美しくして慈けあるダイオネよ、
希臘の凡ての美を統べ給ふ御神よ、
願くは生かせ給へかし、この女を。

われ立ちて像をいだきぬ、力を罩めて、
力を罩めてわれ接吻ぬ、其の唇に、

其の唇ぞ、つと潤ひきたりぬ、今し、紅に色付きて。
輝ける其の眼、波うてる其の胸内、
わが肩に置く其の腕、亂れ散る其の髪毛。
ピクマリオン！ 彼女叫けびぬ。
ガラテヤ！ われ答らふ。
溢るかな其の涙、溢るかな此の涙、
泉の如く溢るかな、溢るかな泉の如く、
あゝ全希臘はわが前に、躍り、戯れ、哄笑す！

婚姻

我、
君を視、

君を悟り、
君を想ふ。

君は織り、
君は唄ひ、
君は黙す。

眺む。
笑ふ。
美し。

善し！
歩み、

語り、
君を娶る！

浴後

アレクサンドリア人、サイシウスこれを誦す。

開き行く一巻の書冊の上に、われ、ニイルの流域、
單調と無爲とを、黙禱の衣に被ふものを眺めぬ。
神在りや？ 數多き禁條の上を歩む冷たき足、

彼在るか？

われ、サイシウス、此を疑ふ、
然ど、そはわが酒興のみ、げに其は一つの遊戯のみ。
わが大道、恒に躁宴の處に通ずるのみ。

われ、頭を廻す時、善き友、四邊より歩み來たり、
われを抱く。

日麗かなる刻、如何に心持よく詩の上に、
哲學の上に、語りかつ聞くわれぞ。

然ど、わが掌、懼くは強く、ひとりの背をも叩き得じ、心を罩めて。
その掌、ユーリビデスが「トロヤの女等」の爲に、
涙はふりし経験かずある、その掌は！

我、眞に涙を流せしは幼年の頃、四手樹の下、
スコバスが作、ヴェヌスが石像に接吻なせし刻のみ、
わが動悸、今は余熱に波うてる一握の灰のみにして、
百人の女を得む、鳩は鳩なれば！
と叫ぶのみ。

われ愛の饒舌を浪費なし、女の群を引き捕へ、
父の富財を散り撒きて、双手は恒に酒の香に塗れぬ。
かくて信頼は赤き舌持つわれにも來たり。
春はわが年齢を飾れる。

不満なき生涯！ げに其をわれの導びけど、
密に恥るものたるを忌む、故なきに口より出づる、
小兒の言葉、「わが神よを！」

ああ、實にかかる故、侮蔑を身に感ず。
實に、かゝる故、われ、床上に唾を飛ばす！

嗤へ！ サイシウス、神の存否は、
かがなひし手先を固むる筈杖のみ。
酒の味、女の容色に如何なる關係ありて、かく惱む。

われ、手を伸ばし、香膏を塗り込む、
亞典生れの女奴隷の頸を引き上げ、其の美貌に、
われ、獨り、くくと笑ふ。くくと笑ふ。

Carmen 一九一八年

永井荷風氏に

鴉筆は折れぬ。背に立つはカルメン。彼女大きく唇を開きて哄笑ひ、その掌を置けるわが肩を、その後引きぬ。高まれる正午の太陽に、燿やく窓硝子、紫色に燦れる埃及煙草の香は、室内に充つる心地して、卓子の上に置ける霸王樹の桃色と白色との絞りをなせる花の、微かなる香ひは、ここに全く消されて在り。接吻の後、カルメンは肩越に長く腕を延ばし、黒きシンスもて造れる頸飾を玩さめる右の手を眺めつゝ、左の手をわが頭上に置き、また其の上に、柔かき頤を置く。髪は長く垂れてわが頬にふれ、作り終りし詩句を讀み返えすわが眼は紙のうへより外づれ、さて微笑む、輕やかに、指先もて卓子の上を叩きつ。

黒きシャルを脱ぎ、緋色をなせる衣裳の積を爪弾きつ、ゆさゆさと、其を揺すること二三度、調子を取りし足なみもて室隅へと歩みゆけるカルメンは、振り返りて、聲高くわが名を呼びぬ。かくてわが藤椅子、方向をあらため、立ち上がりしわれの、女のかたへと近かよらむとするに、カルメンたちまち走り來たり、跳び上がりて、われを抱く。窓近かき庭園の噴水より來たる水の輪は、二人の髪の上へに、よれつ、ほぐれつ、女はわが耳もとに呬やく、ひと言葉ごとに途絶るる息の柔かく、わが頸に、かかるこの刻。

女の背筋のあたりに、わが腕のかるく廻らされてあるを、肩を激しく振りて緩ましむると共に、わが頸首のうへに結べるカルメンの掌は、二つに音するここに迅く破れて、再びわが頤を支ふべく集りぬ。白き指もて、わが頬を強く押すところの此の女、眦目にわれを眺むれど、その長き睫毛の、

眼臉を被ひて、その美しき眼のひかり見え、ただ深められし笑靨のあたり、やゝ朱味の浮かべるを、思ひあがれる様に、われのうち眺むるのみ、カルメン！……咽ぶばかりに笑ひ倒けたるわがカルメンは、近づくわが額をつき除け、急ぎ、室外へと駆け去りぬ。明るみを増さむため三方を厚き硝子もて張れるこの部屋の、うつら、うつらと増しゆく暖かみに、そぞろ睡氣を覺えて、開く窓より吹き入るる軟風と共に、藤椅子のうへにとわれは臥し倒れぬ。

ああ、太陽は顔の上に！ 胸の上に！ 足の上に！ 女の庭より叫ぶわが名に、我破と跳ね上がれるわれの窓際へと走り寄るに、女のはふり擲げし面帕、風に乗りて四手の樹の頂に懸り、カルメンは誇り氣に首を斜めに傾げ上げつゝわれに揖禮す。兩の腕は肩上に高く差し挙げられ、踵は地を離れたり。激しく盛り上り、また幾條かの圓味を帯べる皺を作りて沈む肩峯

のあたり、光は陰と共に勢ひよく注ぎ流がれ、引きつるる筋肉は、胸部のあたりを押しひろげて、雄鹿のごとく韌く地を蹴る足の震動をこまて上がり行きて、風に喘げる二つの薔薇のごとく乳房は空の中にうち揺らめく。頤を上げ、全く空に向へるカルメンの脣、かくてOLYPIEとなりて、太陽に接吻せんとし、甲状腺は、ふくらみて陰を二方にくくり、頸の根もととなる窪に及ばんとす。ああ、海洋上、閃めく翅をとばす飛魚の群、わが雄健なるカルメンの肢体は、光に、涵り、溢れ、熱情に蜚りを打つて、高く、高く、上騰せんとす！……

水の中なるカルメン！ 跳ね上がる水沫は、足を埋め、胸を打ち、額を濡らし、銅もて作れる黝みし牧神は、その笑める口より水を勢ひよく噴き上げ、其の兩の頬は擧げたるカルメンの掌の色を増さしむ。水滴の美しき粒は、女の額より腕より胸より躍り落ちては、歡聲を女に強ふる。心地よく

引き締まれる其の体勢の激しく、うつり變り伸び上りては、水をば叩く兩の足を、目のために朱色に其の端を透き通らす、つややかに光るかな女の足！……………

狂へるカルメン！ 空は針うつ人を待つごとく、其の髪の毛の先を喰ひ止めて、亂れつる其の頭は、水沫のなかに激しき楕圓を書きて奔騰す。顔いまは全く見ええず、ただ真白く陰と共にわが眼に泛び、口唇の極だちて赤きが振り上げられし腕の間に、また小き圓を書がけるを打ち眺むるのみ。引きつる肩胛筋は背の筋肉の凡てを動かせ、深みつる背の窪は、太き刺青を引けるが如く、掌と踵とは一線上に在り。ああ、太陽の發散する靄のいかに、心地よくカルメンの肉体を煙らすぞ。空の磨きをかけて洗ふが如く、水邊一列の阿列布の樹林を背後に、閃めき耀やくわがカルメンの裸體！ 其の裸體、頬を蒼白くなさしむる程の疲れのために、支へを失なひ、いま

や、一際めだつ水沫をあげて、どうとばかり、あふむけに伏し倒る！……………

われ、始めてカルメンの眼の下縁に涙の泛べるを見たり。女しづかに接吻を求めぬ。力なくされど深く續くる女の息は、次第に緩み行きて、腕は柔かくわが頸にまつはり、わが背をすべり、遂にわが舉ぐる左の腕に支えられぬ。肩のあたりに微かなる喘ぎあり。被へる白き襯衣は、ために、髪に挿せる牡丹の真赤なる花瓣を揺り落とさむとし、汗ばめる額は髪根もとの邊に粒なす汗を、作り成す。わがカルメン、はたと其の顔をわが胸のうへに伏せぬ。

げに仄かなるは髪のかほり、動かざる、黒き、其の髪毛、睡ましき香のうち、わが首を被ひ、背柱のをはりなる、棘のごとき突起のために伸ばさ

れたる襟首の上に生じたる二つの圓味は、頸の片側に落ちむとする陰の
たちを圓くそめなす所の深き窪に押し止め、窓際を飛び過ぐる雲雀に心惹
かれて、わが眼のふとも外るる暖間、其は、はたと詐りに跳ね上がりぬ。
哄笑するカルメン！ 女の額、再び輝きわたり、笑ひは其の眼もとに溢れた
り。女、われを眺む。悦こび、勇み、涙に、わが宇宙の、霞むこちぞす
る。カルメン！ カルメン！ ああ、わがカルメン！ 其のわがカルメン
ぞ、今、靱く、強く、わが口唇の上に、接吻をなすは。

畢

私は正午に於て神を求める。深夜の思念によつて神を見、神を聴く
よりも寧ろ眞晝、熾烈なる人間活動の絶嶺に於て、この世界が最も顯
らかな姿相をとる時に於て、神に合一せむ事を願ひ求める。私の信
念に従へば最も善く神を忘れた時が、最も善く神に近ずいた時であ
る。人間に與へられた分に於て世界創造に最も努め勵む時、人間の
via lifeがその發揚の極度に達する時、人は自から神との對立を離れ
神そのものと合一する。働くのが最上の祈禱、眞晝こそ激しく其祈
禱が求められる。

